

曹操政権における士大夫官僚の 動向について

江 下 光 幸

目 次

はじめに

第一章 地方政治の実態その傾向

第一節 曹操政権における地方政治の実態

第二節 曹操政権における地方政治の傾向

第二章 尚書から見られる曹操政権

第一節 尚書の地位の歴史的変遷

第二節 曹操政権における尚書の地位

第三章 清流士大夫と地方官の関連性について おわりに

はじめに

曹操政権の政治的性格については、これまで様々な議論が行われている。本稿ではこれまであまり論じられなかった曹操政権下の地方政治のあり方に注目し、さらに地方行政を担った士大夫層が曹操政権でどのような地位を占めていたのかを追求することによって、曹操政権の政治的性格を解明していきたい。

この時代の地方政治を見ていく上で参照となるのが蔭森健介氏の

研究である。蔭森氏は史書に散見する地方官に対する評価である「評語」に注目し、地方官の政治のあり方を類型化し、その検討を通じて地方政治の状況を考察されている。地方官の実態を明らかにする上でこの論は非常に示唆に富むものと言える。ここでは蔭森氏の論を参照にしつつ、まず曹操政権下の地方政治をどのように位置付けられるかを考察していく。

一

周知のように、曹操が政権を確立する要因となったのは華北の統一にあった。その第一歩が二〇〇年の官渡の戦いの勝利である。この勝利により曹操は河北地方を掌握し、二〇六年頃までには戦後処理を完了させ、匈奴や烏丸などの異民族を軍に組み込み、農土を拡大するなど、軍事力・経済力の強化に成功する。また、ほぼ同時期に、江南地方攻略の足がかりとして揚州北部や荊州北部を掌握する。その後、二一二年には関中地方において馬超・韓遂の乱が勃発するも、曹操はここでも勝利を収め、関中地方の掌握に成功する。関中地方でも河北地方同様、二一二年頃までには戦後処理を完了させ、ここにきてほぼ華北の統一を為すのである。各地方での政治は、河北・関中地方が主に戦後処理としての、荊州北部・揚州北部地方が主に江南（孫呉）の最前線という緊張した状況下における政治と云うべきものである。当然、正史においても曹操政権における地方政治の実態が詳細に記されているのはこれらの地方である。

それでは、これらの地方の政治の特徴はどのようなものだろうか。例えば河北では、并州刺史であった梁習は、「誘諭招納し、皆な禮もて其の豪石を召す」という政治を執り行ったという。また、関中では、金城太守であった蘇則が、「外に羌胡を招懷し、其の牛羊を得、以て貧老を養う。民と與に糧を分かちて食し、旬月の間、流民皆な歸し、數千家を得」たとある。彼らの政治の主眼は、農業の振興、貧民・流民らの救済、民の教化などにあった。これらの政治のあり方は、儒教的徳化主義と中国において伝統的な農本主義という漢代の「循吏」においてすでに顕著に見られる。

さらに詳しく見ていくと、梁習は、「其の命に従わざる者、兵を興し討を致し、斬首すること千數、降附する者萬計たり。」という側面が見られ、蘇則も「乃ち明らかに禁令を爲り、犯す者有らば輒ち戮し、其の教えに従う者は必ず賞す。」という面を覗かせている。これらの政治のあり方は、社会秩序の安定を阻む勢力に対し、武力・法律・刑罰の厳しい運用により、容赦なく弾圧していくという漢代の「酷吏」においてすでに顕著に見られる。

曹操政権における地方政治は漢代の官僚に見られる「循吏」的政治のあり方を「酷吏」的政治のあり方でもって補うという政治であり、蔣森氏の述べるところの「威恵」と評される政治であったと考えられる。

ここで注目したいのは、これらの地方官がほぼ後に、曹操政権で尚書に就任していることである。それでは、曹操政権で尚書とはど

曹操政権における士大夫官僚の動向について

のように位置付けられるのであろうか。

二

魏王朝以降の尚書の重要性については、すでに宮崎市定氏の詳細な研究があり、その他にも多くの研究の蓄積がある。しかしながら、曹操政権での尚書については、なお充分に論じられていない。ここでは具体的に史料を挙げて説明する余地はないが、曹操政権においても、後の魏王朝と同様、尚書は特に人事の最高責任者であり、政権は尚書に就任した者によって運営されていると言って良い。

さらに、曹操政権初期において、尚書を独占していたのが、荀彧をはじめとする後漢末清流派士大夫であることに注意したい。そして興味深いことに第一章で採り上げた地方官が、後漢末清流派士大夫の後を承けて尚書に就任し、政権の中枢を占めていく傾向が見られるのである（表参照）。

魏公国期 (213~216)		
尚書令	尚書僕射	尚書
荀攸 涼茂	毛玠	崔琰 常林 徐奕 何夔 張既 高柔
尚書郎		

魏王朝前期 (220～239)	魏王国期 (216～220)
尚書僕射 尚書 刑・顓・王・觀・杜・襲・趙・儼・陳・羣	尚書僕射 尚書 李・義・傅・巽・陳・矯・杜・畿

※右傍に〇〇を附した人は、のちに地方官から尚書に就任した士大夫を示す。

※彼らの多くはひきつづき台閣に列するので、それ以外の新しい登官者のみ記す。

三

第一章で採り上げた地方官の多くが、後漢末清流派士大夫の後を承けて尚書に就任したことは、どのような意味を持つのだろうか。

これらの地方官は第一に為政者としては、儒教的政治理念を有し、その理念に基づいた政治を執り行い、地方の安定を図る後代には「威恵」と評される政治を執り行っていた。第二に一個の人間としては、物にこだわることなく、簡素、簡潔ですっきりとした生活、挙動、人間性を表す「清」の思想を理想とし、それを体現する存在であった。この二点は、曹操政権初期において尚書の地位を独占していた後漢末清流派士大夫が理想とする姿でもあった。

また、すでに指摘されるように曹操は荀彧ら後漢末清流派士大夫を登用する一方、才能主義的な人事を行っている。才能主義とは、道徳より政治的手腕を重視するというものであったが、地方官は政治的手腕を有し、なおかつ「清」を体現する存在であった。曹操の才能主義は必ずしも「清」を排除するものではなかったと考えられる。このように見てくるならば、曹操政権は一面では後漢末清流派士大夫の政治理念を体現していたと言えよう。

おわりに

曹操政権の下、地方官は漢代の循吏的政治のあり方を酷吏的政治のあり方でもって補う、蔣森氏の述べるところの「威恵」と評される政治を執り行い、戦乱後の地方社会の秩序を回復させ、曹操の支配領域を安定させる存在であった。また同時に個人としては、「清」の思想を有し、それを体現する存在であった。これらの地方官の政治のあり方と思想は、曹操政権初期に尚書の地位を独占していた荀彧ら後漢末清流派士大夫が理想とするものであった。これは曹操政権においては、後漢末清流派の政治理念や思想が、中央・地方共に重要であったことを示していると言えるのではないだろうか。